

冷気は眩しい水面に似ている
掬いあげた、その意味のなさを喪失と重ねて
破れた唇に吹き荒れる愛の残照が絡まってやわらんできた頃に
あなたの心臓になることができたなら
いつでも心地よさを裏付けする過程だけを投影して
光束が、現像されるフィルムのようにやがて襲ってくる
向かう先のない動詞たちは痛みに曝されて、流れるように
手放してきた風景に走っていきたい
かじかんだ手を、振りほどく、その仕草に安心したい

写真はいまと昔の距離のゆるやかな忘却だ
瘦けた青い山は曖昧な序章に接続されていく
(ただ永久にテキストのなかに)
そこ、そこなら信頼することも、惑わされることも、溺れることもできる
それなら細めた瞼のなかでしばらく循環してみよう
ほら、忘却したくないことをひとつずつ失うのなら
海底は近くなる
防波堤で泳ぎたいことを微かに永続する語彙にしたとして
その溢れそうな浴槽だけなら溺れることができない
錆びかけた痙攣に上ずりながら抱きよせられたら
抑揚がうわついて離れていく
離れていき
その望みに反して伸びていく水平線の先にある淡い王冠を
置いてきてしまう

四月の日記はクルージングみたいに静かに乾いていて
翼を模した船影が　ひとつ　ふたつ　みつと零れる
気がつけば手のひらには液状のものが流れ溶解されていき
物語は加筆されて簡素になっていく
青い水面がはねた

星になりたかったことはとても幼くて
逃避して、奪う　会いたかった
(怪物がいたとしたら
その精度に花が植えられる
地平線が背中に似てくる)
あなたのこえは届かない船底の残響に

そして冷気が過ぎたあとには染みができて
甘く傾けたら血液がたれていることを知る、記憶が指し示す
溺死というのは風だ
沈んで、しずんで、失われたことだけが止めどなく沸いてくる
過誤のなかに
水流よりも感性を飲んでいる
挨拶をしても
海は消えかかっていた
そのむなしさを
語彙のなかに視ている

gsr tape vol.2



grey sheep romance

庭

林やは

春らしく性愛のキス天国で育たない種降っておいでよ
曖昧な実を食べるとき箱庭の人間たちがほほえんでいる
兎なら跳べる人なら踊れるよ白日の恋を口ずさんで
幻は滅ぼすことだ浴槽で眠りについた怪物がいる
牧場ではだかになって歌ってる南の山で羊が死んだ
純朴な人よいつかは抑揚で神をえがいて遊んでほしい
吸血で滅んでしまうえいえんに人類だけの薔薇の庭園
創造を満ち満ちにした快楽は愛の谷間で寝ころんでいる
葬送の水をくんでた花獣にもラヴはわかるよ累々の殻
人間に親身になって破滅して海に溺れて神さまになる
世界から絶望してく堕ちていく永久不滅的なメロディー
楽園が崩落したら迎えるよ埋葬しても大丈夫な家
林檎さえ赤かったんだぼくたちの愛慾なんてずっと熱いさ
放牧はあたたかかった人間もあたたかかった蔓延っている
水面から知らない名まえ動物は前世をおいて走っていくよ
翅のない植物たちは懐かしい音楽になる劣ってしまう
ぼくたちは人間に似せてつくった、だから、あなたの、もので、火の鳥
この地球が天国ならば神さまはあなたでもある終末の歌
呼んでいるこれは遠吠え 肉体を逸脱したらはじまるかもね
なみだにも波があるから泳げる?ときくんだよ また神を創って

風景の窓辺

鈴木龍也

薄着で会えた頃に流した音楽は眠りみたいに覚えていない
喪失を拭う代わりと艶やかな劇中劇に立ち尽くす朝
きっとまた微睡むように思いだす海を点描する航海士
やるせなさ 霞んだ海に翔んでいたカモメの白さを想うのなら
やましさを瞼の奥に消すまえのあなたの稚子を信じてみたい
すぐに笑うと写真は同じ表情の、同じ光の 遠い夕方
Play the song like you believe in sweet dreams (それからの甘い歲月……)
厳密な定義を添える天体のひとえに生まれ夜を嗅ぐまで
それなのに絵師になれない身体は船出に向かうときの無音さ
あなたが空に吐くように折る真鶴の未練の無さを恥じれるのなら
僕たちはありえもしない想像に鳴きすぎている鳥に誓った
韻律はどこまでも僕やあなたをたどとどしく かつ滑稽に
詩人は何度祈れば花のコカインの…朝方の…… I'm not anxious
その傷に立ち会うための破調なら癒えることなき鑑賞だろう
逃げるように乾かす髪は蠟台に灯される風景の窓辺へ
また起きて花氷には愛情を朽ちていく過程に永遠を
綿飴が膨らむまでの物憂いをゆっくり溶かすための冬だよ